武蔵野日曜聖書講筵

十人の義人
――創世記第15章～18章――

１９７７年3月13日
小池辰雄

神との契約　妻サライと侍女ハガル　無者キリスト　無者の根源現実は無限無量　我十人のためにほろぼさじ　信ずるとは聖霊を受けとる内的行為　義人はただキリスト一人

【創世記15】

7又彼に言いたまいけるは 我は此地を汝に与えて之を有たしめんとて汝をカルデアのウルより導き出せるエホバなり 8彼言いけるは 主エホバよ我いかにして我之を有つことを知るべきや 9エホバ彼に言いたまいけるは 三歳の牝牛と三歳の牝山羊と三歳の牡羊と山鳩および雛き鴿を我がために取れと 10彼乃ち是等を皆取りて之を中より剖き其剖きたる者を各相対わしめて置けり 但し鳥は剖かざりき 11鷙鳥其死体の上に下る時はアブラム之を駆いはらえり 12斯て日の没る頃アブラム酣く睡りしが其大いに暗きを覚えて懼れたり 13時にエホバ、アブラムに言いたまいけるは 爾確かに知るべし爾の子孫他人の国に旅人となりて其人々に服事えん 彼等四百年のあいだ之を悩まさん 14又其服事えたる国民は我之を鞫かん 其後彼等は大いなる財貨を携えて出ん 15爾は安然に爾の父祖の所にゆかん 爾は遐齢に達りて葬らるべし 16四代に及びて彼等此に返りきたらん 其はアモリ人の悪未だ貫盈ざれば也と 17斯て日の没りて黒暗となりし時 烟と火焔の出る爐其切剖たる物の中を通過り 18是日にエホバ、アブラムと契約をなして言いたまいけるは 我此地をエジプトの河より彼大河即ちユフラテ河まで爾の子孫に与う 19即ちケニ人ケナズ人カデモニ人 20ヘテ人ペリジ人レパイム人 21アモリ人カナン人ギルガシ人エブス人の地是なり

【創世記16】

1アブラムの妻サライ子女を生まざりき 彼に一人の侍女ありしがエジプト人にして其名をハガルと曰えり 2サライ、アブラムに言いけるは 視よエホバわが子を生むことを禁めたまいければ請う我が侍女の所に入れ我彼よりして子女を得ることあらんと アブラム、サライの言を聴きいれたり 3アブラムの妻サライ其侍女なるエジプト人ハガルを取りて之を其夫アブラムに与えて妻

となさしめたり 是はアブラムがカナンの地に十年住みたる後なりき 4是において アブラム、ハガルの所に入るハガル遂に孕みければ己の孕めるを見て其女主を藐視たり 5サライ、アブラムに言いけるは わが蒙れる害は汝に帰すべし 我わが侍女を汝の懐に与えたるに 彼己の孕めるを見て我を藐視ぐ 願わくはエホバ我と汝の間の事を鞫きたまえ 6アブラム、サライに言いけるは 視よ汝の侍女は汝の手の中にあり 汝の目に善と見ゆる所を彼に為すべし サライ乃ち彼を苦めければ 彼サライの面を避けて逃げたり 7エホバの使者曠野の泉の旁 即ちシュルの路にある泉の旁にて彼に遭いて 8言いけるは サライの侍女ハガルよ汝何処より来れるや又何処に往くや 彼言いけるは 我は女主サライの面をさけて逃ぐるなり 9エホバの使者彼に言いけるは 汝の女主の許に返り身を其手に任かすべし 10エホバの使者又彼に言いけるは我大いに汝の子孫を増し其数を衆多して数うることあたわざらしめん 11エホバの使者又彼に言いけるは 汝孕め り男子を生まん 其名をイシマエル（神聴 知）と名くべし エホバ汝の艱難を聴知したまえばなり 12彼は野驢馬の如き人とならん 其手は諸の人に敵し諸の人の手はこれに敵すべし 彼は其諸の兄弟の東に住まんと 13ハガル己に諭したまえるエホバの名をアタエルロイ（汝は見たもう神なり）とよべり 彼いう 我視たる後尚生くるやと 14是をもて其井はベエルラハイロイ（我を見る活ける者の井）と呼ばる 是はカデシとベレデの間にあり 15ハガル、アブラムの男子を生めり アブラム、ハガルの生める其子の名をイシマエルと名づけたり 16ハガル、イシマエルをアブラムに生める時アブラムは八十六歳なりき

【創世記17】

1アブラム九十九歳の時エホバ、アブラムに顕れて之に言いたまいけるは 我は全能の神なり 汝我が前に行みて完全かれよ 2我わが契約を我と汝の間に立て大いに汝の子孫を増さん 3アブラム乃ち俯伏たり神又彼に告げて言いたまいけるは 4我汝とわが契約を立つ汝は衆多の国民の父となるべし 5汝の名を此後アブラムと呼ぶべからず汝の名をアブラハム（衆多の人の父）とよぶべし其は我汝を衆多の国民の父と為せばなり…… 7我わが契約を我と汝および汝の後の世々の子孫との間に立て永久の契約となし 汝および汝の後の子孫の神となるべし…… 22神アブラハムと言うことを竟え彼を離れて昇り給えり

【創世記18】

1エホバ、マムレの橡林にてアブラハムに顕現たまえり…… 13エホバ、アブラハムに言いたまいけるは 何故にサラは哂いて我老たれば果たして子を生むことあらんと言うや 14エホバに豈為し難き事あらんや…… 16斯て其人々彼処より起ちてソドムの方を望みければ アブラハム彼等を送らんとて倶に行

けり 17エホバ言い給いけるは 我為さんとする事をアブラハムに隠すべけんや
18アブラハムは必ず大いなる強き国民となりて天下の民皆彼に由りて福を獲
るに至るべきに在ずや 19其は我彼をして其後の兒孫と家族とに命じエホバの
道を守りて公義と公道を行わしめん為に彼をしれり 是エホバ、アブラハムに
其曾て彼に就きて言いし事を行わん為なり…… 22其人々其処より身を旋して
ソドムに赴むけり アブラハムは尚エホバのまえに立てり 23アブラハム近より
て言いけるは 爾は義 者をも悪者と倶に滅ぼしたもうや 24若邑の中に五十
人の義 者あるも汝尚お其処を滅ぼし其中の五十人の義者のためにこれを恕
したまわざるや 25なんじ斯の如く為して義者と悪者と倶に殺すが如きは是あ
るまじき事なり 又義 者と悪者を均等するが如きもあるまじき事なり 天下
を鞫く者は公義を行う可にあらずや 26エホバ言いたまいけるは 我若ソドムに
於て邑の中に五十人の義 者を看ば其人々のために其処を尽く恕さん 27ア
ブラハム応えていいけるは 我は塵と灰なれども敢て我主に言上す 28若五十人
の義者の中五人欠けたらんに爾五人の欠けたるために邑を尽く滅ぼしたも
うや エホバ言いたまいけるは 我若彼処に四十五人を看ば滅さざるべし……
アブラハム言う 請うわが主怒らずして今一度言わしめたまえ 若かしこに十
人看えなば如何 エホバ言いたもう 我十人のためにほろぼさじ

●神との契約

この間は創世記15章の6節までをいたしました。今日は16章と書きましたが、ちょっとその後を少しやっておきます。15章7節から、

7又彼に言いたまいけるは 我は此地を汝に与えて之を有たしめんとて汝をカルデアのウルより導き出せるエホバなり

お前をカルデヤのウルより導いてきたエホバだと、神様はアブラハムに言われたわけです。

8彼言いけるは 主エホバよ我いかにして我之を有つことを知るべきや 9エホバ彼に言いたまいけるは 三歳の牝牛と三歳の牝山羊と三歳の牡羊と山鳩および雛き 鴿 を我がために取れと

犠牲を要求する神様なんですね。遊牧の民というのはどうしても血なまぐさいところがある。「三」という数は神聖な数というわけです。

10彼乃ち是等を皆取りて之を中より剖き其剖きたる者を各相対わしめて置け り但し鳥は剖かざりき

これをアブラハムが取って動物を二つに裂く。契約の徴として、その間を通るんです。

11鷙 鳥 其死体の上に下る時はアブラム之を駆いはらえり

鷙鳥がもしやってきて死体を食べるというと、契約が無駄になる。ダメになってしまう。

そういうわけで鳥は追い払ったなんていうことが書いてある。いかにも原始的な話です。「ベリート」というヘブライ語の「契約」という字は「裂く」という言葉から来ている。動物を裂いて、そして誓う。「中を通る」という妙な言葉なんです。まぁ「契約」という言葉の意がそんなことから来ているということをちょっと覚えておいて頂きたい。

12**斯て日の没る頃アブラム酣く睡りしが其大に暗きを覚えて懼れたり** 13**時にエホバ、アブラムに言いたまいけるは　爾確かに知るべし爾の子孫他人の国に旅人となりて其人々に服事えん彼等四百年のあいだ之を悩まさん**

これはエジプトにおける半奴隷状態のことを預言しているような言葉です。エジプトに滞在していたのが大体、学問的には350年位とされていますが。しかし、聖書の計算では430年という。これはガラテヤ書にも書いてある。まぁとにかく300、400年保留になるというようなことです。

14**又其服事えたる国民は我之を鞫かん**

しかしながら、我らをまた審く時が来ると。これは出エジプト記7章から9章に渡って書いてある事柄です。

其後彼等は大なる財貨を携えて出ん

出エジプトすると。

15**爾は安然に爾の父祖の所にゆかん**

まぁ別の世界ですね。

爾は遐齢に達りて葬らるべし

この「アブラム」という言葉が「高き父」という意味なんです。そこで「遐齢」という言葉はそこからも連関していると思われます。

16**四代に及びて彼等此に返りきたらん其はアモリ人の悪未だ貫盈ざれば也と**

まぁここらの記事は果たして本当の預言であるか、後からこういうように権威づけたかなんていうことを学者はすぐ問題にするわけですけれども。

17**斯て日の没りて黒暗となりし時　烟と火焔の出る爐其切剖たる物の中を通過り**

この「火」というのは聖火、聖なる火なんて言われるように、やはりそのことはギリシアでも同じです。出エジプト記3章にも、ヤーヴェーが現われる時に

「火の中に現われた」

とあります。そのようなことです。神様はそういった具体的なしるしをもってなさるということですね、ヤーヴェーの神は。

18**是日にエホバ、アブラムと契約をなして**

即ち裂く行事をなして、ということなんですね。

言いたまいけるは我此地をエジプトの河より

ナイル河です。

彼大河(かのおおかわ)即ちユフラテ河

即ち西の涯て、東の涯て。

まで爾の子孫に与う 19 **即ちケニ人ケナズ人カデモニ人** 20 **ヘテ人ペリジ人レパイム人** 21 **アモリ人カナン人ギルガシ人エブス人の地是なり**

「ケニ人」はカナンと同じでカナンの南部の方。「ケナズ人」はカナンと似ているでしょ。「カデモニ人、ヘテ人、ペリジ人、云々」と、これはみんなカナンを中心にして南、東、西、北と、大体東西南北になっている。そういうのをみんな与えるというわけです。

●妻サライと侍女ハガル

それから16章に行きまして、

1 アブラムの妻サライ子女(こども)を生まざりき

ヘブライ人、セム民族は子供が無いということを非常に恥としていたわけです。

彼に一人の侍女(つかえめ)ありしがエジプト人にして其名をハガルと曰えり

「ハガル」という言葉は「逃げる」という意味です。

2 サライ、アブラムに言いけるは 視よエホバわが子を生むことを禁(とど)めたまいければ請う我が侍女(つかえめ)の所に入れ我彼よりして子女(こども)を得ることあらんと

「侍女と交わって子供を得よ」ということをサライが言うわけです。まぁこれはちょっと神様との約束を破るようなことを言っている。

アブラム、サライの言を聴きいれたり 3 アブラムの妻サライ其侍女なるエジプト人ハガルを取りて之を其夫アブラムに与えて妻となさしめたり

まぁ重婚というようなことですね。

是はアブラムがカナンの地に十年住みたる後なりき

そうすると、85歳位です。

4 是においてアブラム、ハガルの所に入るハガル遂に孕(はら)みければ己の孕めるを見て其女主(にょしゅ)を貌視(みさげ)たり

女主人であるサライを蔑(さげす)むということになってしまった。そこでまたサライがけしからんと言ってアブラムに訴えたり、そんなことがゴタゴタと書いてある。それでサライの前に居れなくなって、このハガルは名前の通り逃げてしまう。「サライの顔をさけて逃げた」と書いてある。

5 サライ、アブラムに言いけるは わが蒙(こうむ)れる害は汝に帰すべし 我わが侍女を汝の懐に与えたるに 彼己の孕めるを見て我を貌視(みさ)ぐ 願わくはエホバ我と汝の間の事を鞫(さば)きたまえ 6 アブラム、サライに言いけるは 視よ汝の侍女は汝の手の中にあり 汝の目に善(よし)と見ゆる所を彼に為(な)すべし サライ乃ち彼を苦めければ

彼サライの面(かお)を避けて逃げたり 7エホバの使者(つかいあらの)曠野の泉の 旁(かたわら) 即ちシユルの路

これはエジプトの方に向かっている路。

にある泉の旁にて彼に遭いて 8言いけるは サライの侍女ハガルよ汝何処より来れるや又何処に往くや 彼言いけるは 我は女主サライの面をさけて逃ぐるなり 9エホバの使者(つかい)彼に言いけるは 汝の女主の許に返り身を其手に任かすべし

10エホバの使者又彼に言いけるは我大いに汝の子孫を増し其数を衆多(おおく)して数うることあたわざらしめん

これを祝福するというわけです。

11エホバの使者又彼に言いけるは 汝孕め り男子を生まん 其名をイシマエル(神聴知(きこしめす)と名(なづ)くべし

「イシマエール」とは「神聴き給う」ということです。神様は聞き入れたと言う。

エホバ汝の艱難(くるしみ)を聴知(きこしめ)したまえばなり 12彼は野驢馬(のろば)の如き人とならん

「野驢馬」というのはなかなか人に馴れにくいという意味ですね。

其手は諸(すべて)の人に敵し諸の人の手はこれに敵すべし

喧嘩をすると。

彼は其諸の兄弟の東に住まんと

これはやっぱりイシマエル族の元祖ということになるわけです。まぁイスラエルとあんまり仲良くなくなるわけです。

13ハガル己に諭(さと)したまえるエホバの名をアタエルロイ(汝は見たもう神なり)

「アッター」汝は、「エール」神である、「ロイ」見る。「よく顧みてくださる神様」という意味ですね、「見たもう」というのは。

とよべり 彼いう 我視たる後尚生(のちなお)くるやと

即ち、あなたとこうやって相まみえて、生きることができますかと。神様を見るということは非常に恐ろしいことだと。

14是をもて其井(いど)はベエルラハイロイ(我を見る活ける者の井)

神を見る者は活きているところの井戸、そういう名前ですね。

と呼ばる是はカデシとベレデの間にあり

ベレデというのはよく分からないようですが。

15ハガル、アブラムの男子を生めり アブラム、ハガルの生める其子の名をイシマエルと名づけたり 16ハガル、イシマエルをアブラムに生める時アブラムは八十六歳なりき

だぶって書いてありますが、これは資料が違うからこうなっている。

●無者キリスト

それから17章に行きまして、

1アブラム九十九歳の時エホバ、アブラムに顕れて之に言いたまいけるは
我は全能の神なり 汝我が前に行みて完全かれよ

「全能の神」とは「エール・シャッダイ」といいまして、非常に力あるところの、オールマイティの神様です。

「汝我が前に行みて完全かれよ」

と。この言葉はちょっと注意を要する。「ヒッ ハ レイク」というのは

「私の顔の前にしっかり歩け」

という、特に強い言い方をしています。

「そして完全かれよ」

と、「そして」というのはヘブライ語ではこの場合は「然らば」ともとれるので、

「だから私の顔の前にしっかり歩く」

ということが「完全」という意味である。

「神の前をしっかり歩くことが完全ということ」

である。「ターミーム」という字です、「完全」というのは。これはヨブ記にも出てくる。

「ヨブは神の前に完全し」

というのは同じ字が書いてある。

「神様を相手に歩く」

というのは、生活する、生きること。日常の生活が神相手の生活である。我々はなるほど人間相手に生きていますけれども、それよりももっと奥の本当の現実は、神を相手にしている。西郷南洲が、

「天を相手にせよ」

と言ったでしょ。「天」というのは神様のことを別に「天」という言い方をすることは聖書の中にもあります。「天神」なんていう言葉もあるね、天神様。即ち

「神を相手の生き方」

それが完全さということです。

我々においては今度はキリスト相手です。神様相手では畏れ多い。「キリスト」という言葉は神学的にいいますと、「キリスト」と「イエス」ということは違う。「キリスト・イエス」という言い方と、「イエス・キリスト」という言い方も違う。「キリスト」というときは正に

「油注がれたる者」

という――言葉はそういう意味だけれども――即ち「油注がれたる者」というのは

「聖霊人」

キリストとは聖霊人ということです。

「イエス」というのは普通の固有名詞、人間ナザレ人、人間イエスです。イエスということは人間イエスということ。人間イエスの在り方がどうであったかということは、これは私が言っている

「無者」

なんです。だから、本当は「無者」は「イエス」を表わす。「無者キリスト」ではなくて、「無者イエス」なんです、厳密に神学的にいうとね。

私はキリストという言葉をもっと幅広い意味で使ったわけです。神学者はすぐうるさいことを言い出すからね。第三巻〔『無の神学』１９８２年刊〕ではっきり神学者相手に私は物を言いますから。

「無者キリスト」ということは、無者はイエスなんです。だから、「無者キリスト」ということは、「イエス・キリスト」ということになるんです、本当の言い方で言うとね。キリストは即ち「聖霊人」。聖霊人は本来はアブラムより先にいた。

「我はアブラハムより先にありしなり」

という。

「永遠人」

なんだ。キリストは永遠の人なんです。「ロゴス・キリスト」、即ちヨハネ伝1章1節、

「ロゴス・キリストは神と共に（あるいは神の前に）あった」

という。永遠人キリスト、聖霊人キリスト、その地上における在り方は正に「無者」であった。だから、

「無的実存」

と言うんです。その無者は誰だというと、イエスという人だと。イエスという人が無者。だから

「無者キリスト」

は「イエス・キリスト」ということになるんです。現実のイエスという人は同時にキリスト、同時に聖霊人なんだから、

「無即無限無量」

ということは「聖霊の人」ということ。本当の無であることが同時に本当の聖霊の人である。本当の聖霊の人であるということは、本当の無者であるということです。いわゆる緊張関係でもない。これは何とも説明できない。

だから、私は「劇的」とも言うんです。生命的、あるいは「有機体的」な構造になっている。私たちは、完全はあり得ない、神様の前に。アブラムだって「神の前に全かれ」なんて言ったって大したことない。神様の前に、神を相手に生きるということは一体どういうことなんですか、神を相手に生きるということは平伏（ひれふ）していなければ歩けないんです。

「平伏しの魂」

でなければ神を相手にできない。

「おれは道徳的に立派であるから、神様と一緒に、神を相手に生きれる」

なんて、冗談じゃない。

「よし、おれはひとつ神様を相手にして生きよう」

なんて気張ってみたってダメだよ。そんなものはくたびれてしまう。神様を相手にするということは、もう本当に平伏しの魂にならなくては神様を相手にできない。

「神を相手に生きる」

ということは、

「無者となる」

ということです。

今、私は新約の角度から言っているんですよ、旧約ではそんなことは言えない。手放しで無者になれないでしょ。手放しで「砕け」「平伏し」なんて言ったって、手放しではダメなんです。本当の砕け、本当の平伏しというものは、キリストを相手にしなければできない。即ち、

「キリストを相手にする」

ということは何かというと、「贖主（あがないぬし）」ですから、

「贖主を相手にする」

こと。この聖霊のキリスト・イエスは私たちのために十字架にかかった。キリスト・イエスが十字架にかかって、しかしキリストは、復活のキリスト、聖霊のキリストです。

即ち、私たちはキリスト・イエスを本当に相手にする時に、私たちは「キリスト・イエス」の「イエス」となる。即ち「無者」となる。無者とされている。無者という恩寵の現実を頂いている。

だから、平伏しや砕けがいくらダメであっても、こちら側のことは問題にならない。人間的実存はそれ自身は問題にしなくてよろしい。無者たる恩寵の現実をいつも問題にしている。そうしたら、聖霊の世界に入るから、この無は本当の砕けが来ている。本当に平伏しが来ている。でなかったら、それは聖霊じゃないですよ、霊的傲慢になるから。霊的傲慢になったらダメです。本当に無者であるところに聖霊が働くから、すること為すこと、また人助け、何でもできる。それが完全さなんです。御霊だけが完全さを持っている。

●無者の根源現実は無限無量

もう旧約の世界ではないですよ。

「汝神の前に全（まった）かれ」

なんて言ったって、手放しで誰ができるかと。キリストを相手にしないでは、私たちは生きていられません。

「キリストを相手にするんですか、それは難しいですね」なんて。難しくはないよ。ダメだからキリストを相手にする。ダメだから、しょうがないから、八方破れだから、だからキリストを相手にせざるを得ない。キリストはそういう人を相手にしてくださる。

「我は罪びとを相手にせんとして来た」

と言っているんです、キリストは。罪びとを救わんとして来た。だから、私たちはキリストを相手に、恩寵の現実として恐れなくできるわけです。キリストを相手にしてこそ本当に生きていられる。

まぁこういうことは普通の人に語ったって分からない。やっぱり集会を重ねてだんだんしみ込んでこないとね。いいですね、「完全」ということは私たちにとっては「何も無い」ということです。

「キリストを相手にする無者となれ」

ということです。そして、キリストを相手にすれば無者であるんです。相対的にはどんなにダメであっても、根底は無者であるんです。だから、

「恩寵の現実だ」

と言っているでしょ。そこに必ず働いてくる。本当に力が来ますよ。そのためには本当にキリストを受けとらなくては。キリストの中に自分を投げ入れなくては。

「倒れてみたらキリストの中だった」

と。空気は吸おうと思わなくたって、吸っているじゃないですか。空気の中から出ようとしたって出られないじゃないですか。そのように、

「キリストの恩寵の中に我々はある。こちら側がどうであっても」

というその現実を本当に受けとってごらんなさいよ。もうあなた方は腸（はらわた）の中から異言が湧いてくるから。私の話の奥はもう聖霊が来ておりますから。

「人に何と言われようが、一向に差支えなくなってしまいました。むしゃくしゃしていたのが吹っ飛んでしまいました」

と。それだけのものが、無者の

「根源現実」

なんです。即ち

「無限無量」

の世界なんです。私たちは有限なものだけれども、有限の中に無限の質が来るんです。量的に無限なんて言っているんじゃないですよ、質的な話ですよ、無限無量というのは。

それで、

「わが前に歩みて全（まった）かれ」

なんて、このまま受けとったら、ヘブライ的な、堅苦しい、「いや大変だ」なんてことにな

ってしまう。しゃっちょこ張ってしまう、上下を着ているような。

「神様の前に全かれなんて大変だ」

と。こういう言葉は新約の光でもって逆に取ってしまう。

「もう無者とされているから、完全さが与えられております」

と。完全性というのは聖霊が持っているんだから。

2我わが契約を我と汝の間に立て大いに汝の子孫を増さん　3アブラム乃ち俯伏たり神又彼に告げて言いたまいけるは　4我汝とわが契約を立つ汝は衆多の国民の父となるべし　5汝の名を此後アブラムと呼ぶべからず汝の名をアブラハム（衆多の人の父）とよぶべし其は我汝を衆多の国民の父と為せばなり

そこでお前の名前はこれから「アブラハム」（多くの人の父）と呼ぶと。「アブラム」（高齢の父）ではなくて、「アブラハム」「多くの者の父」という祝福された名前に変わった。この17章にアブラハムという名前にどうしてなったかということが書いてある。3節のところに、

「アブラム乃ち俯伏たり」

と、これは大事なことです。今言った新約の角度の平伏しをしました。「全かれ」と言ったら、そして恵みの言葉を言われたから、アブラハムは神様の前に平伏した。これが大事なんです。それで祝福された。だから、新約のひらめきがちょっと出ている。

7我わが契約を我と汝および汝の後の世々の子孫との間に立て永久の契約となし汝および汝の後の子孫の神となるべし

と、7節に書いてある。それから9節からずっと、これは自分で読んでおいてください。ユダヤ人の割礼のことが書いてある。ちょうどクリスチャンの洗礼のように。八日目に男性の陽の皮を切るということが「割礼」と言う。それから異邦人でも、奴隷でもそれに加わることができたとあります。

アブラハムに今度は「子供が生まれる」と言う。アブラハムは15章で信じたんだけれども、サラは更に信じないわけです。それで、

「どうして私に子供ができるでしょうか？」

なんて笑ってしまった。「イサク」という子供の名前は、「笑い」という意味ですから。

「お前は笑ったろ。だから、お前の子供はイサクという名前にするぞ」

と。それらのことがそこに書いてあります。

22神アブラハムと言うことを竟え彼を離れて昇り給えり

なんてね。いわゆる神道の方でも降霊とか昇霊とかいう。「神様の霊が昇ってしまった」なんて書いてある。まぁ宗教現象というものは、ちょっと似たところがある。

アブラハムは割礼を受けた時は99歳、イシマエルが13歳の時なんて、そんなことが詳しく書いてある。

●我十人のためにほろぼさじ

それから18章に行きます。

1エホバ、マムレの橡林にてアブラハムに顕現たまえり

エホバ或いはエホバの使者が現われたということは、非常に牧歌的なことが書いてある。アブラハムは――神様或いは神様の使いと二重構造みたいなもんですが――懇ろに旅人を迎えて、足を洗ってどうのこうのと。アブラハムという人は御馳走を出して、旅人を懇ろにあしらったことが書いてある。そういうことで、アブラハムという人は非常に情感の厚い人であった。ずっと書いてありますから読んでください。いちいち読みませんから、必ず創世記は読んでおかなければダメですよ、楽しんで食べてください。

アブラハムは旅人だと思ったんでしょうけれども、実は神様の使いだった。それでまた子供のことが書いてあって、天幕の中でやっぱりサラが笑ったなんて書いてあるでしょ。

13エホバ、アブラハムに言いたまいけるは 何故にサラは哂いて我老たれば果たして子を生むことあらんと言うや 14エホバに豈為し難き事あらんや

神様に不可能はあるか、神様は何でもできると。著しい言葉が時々出てきます。16節に行って、

16斯て其人々彼処より

マムレの林から、

起ちてソドムの方を望みければ アブラハム彼等を送らんとて倶に行けり 17エホバ言い給いけるは 我為さんとする事をアブラハムに隠すべけんや 18アブラハムは必ず大いなる強き国民となりて天下の民皆彼に由りて福を獲るに至るべきに在ずや

これで三回目かな、同じようなことが出てくるね。

19其は我彼をして其後の兒孫と家族とに命じエホバの道を守りて公義と公道を行わしめん為に彼をしれり

「彼を知った」というのは、神様は本当にアブラハムを顧み、そしてこれを用いようとする。愛と使命をアブラハムに与える。そういった、

「彼を知れり」

という言い方です。非常に深い言葉です、この場合の「知る」という言葉は。「義と公平」という言い方がよく出てくるでしょ、預言書にも。「ミシパ」「審き」という字と「セデク」「義」という字、この二つはよく使う。義しい審きが即ち公平になる。

是エホバ、アブラハムに其曾て彼に就きて言いし事を行わん為なり

神様は人を知ると、その人を今度は行動に移させる。「知る」ということと「行わせる」ということ、知行だね。神様に知られると行わしめられる。信仰の世界は正に行動的なんです。

「信仰によって義とされる」

という言葉が、非常に安易なことにされてしまって困る。いつも言っている通り、信ずるということが一番内的な行為であるということです。それから22節、

22其人々其処より身を旋してソドムに赴むけり

ソドムへ。「其人々」というのは旅人。神様だか神の使者だかわからないような言い方をしているけれども。

アブラハムは尚エホバのまえに立てり

即ち神の使者の姿をしている神様というようなわけです。

23アブラハム近よりて言いけるは　爾は義者をも悪者と倶に滅ぼしたもうや

即ちソドムというのは悪い邑なんだ。ソドム、ゴモラは非常に堕落した邑。ソドムやゴモラに審判が来る。これは今の死海の中に埋まっているわけです。

24若邑の中に五十人の義者あるも汝尚お其処を滅ぼし其中の五十人の義者のためにこれを恕したまわざるや

五十人義しい人がいたら、邑は悪くても恕してくださいませんかと。どうぞ義しき者を一緒にやっつけるようなことはなさらないでください。だから、恕してやってくださいと。

25なんじ斯の如く為して義者と悪者と倶に殺すが如きは是あるまじき事なり又義者と悪者を均等するが如きもあるまじき事なり天下を鞫く者は公義を行う可にあらずや

天下を審く者は公義を行うべきではないかと、神様に食ってかかっているわけだ。

26エホバ言いたまいけるは我若ソドムに於て邑の中に五十人の義者を看ば其人々のために其処を尽く恕さん

悪人もみんな恕してやると。義人の故に恕してやると。これは非常に著しい言葉ですね。

27アブラハム応えていいけるは我は塵と灰なれども敢て我主に言上す

「我は塵と灰なれども」という言い方はおもしろいね。塵と灰のような申し訳けない奴ですが、

28若五十人の義者の中五人欠けたらんに爾五人の欠けたるために邑を尽く滅ぼしたもうや エホバ言いたまいけるは我若彼処に四十五人を看ば滅さざるべし

また、四十五人だったらどうしますか、恕してくださいますか。とだんだん競り下げていくわけです。そうして、とうとう終いに、

32アブラハム言う請うわが主怒らずして今一度言わしめたまえ若かしこに十人看えなば如何

どうぞ怒らないでください。だんだん善い奴がいなくなって、たった十人、何千何万の人口の中でたった十人では、いかがでしょうかと。

エホバ言いたもう我十人のためにほろぼさじ

十人居れば、その十人のために滅ぼさないと。

●信ずるとは聖霊を受けとる内的行為

それで、この問答はやんでしまった。ところが、エレミヤ記を見ますと5章1節、

「1**汝等エルサレムの邑をめぐりて視且察りその街を尋ねよ 汝等もし一人の公義を行い真理を求むる者に逢わばわれ之（エルサレム）を恕すべし**」（エレミヤ5・1）

とある。たった一人いればゆるすと。そこに「真理」と出てきますね。「エメス」という言葉は「アーメン」という字と同じで、「アーメン」の名詞が「エメス」という字です。「エメス」「アーメン」という、この真理（信実）というのは、ギリシヤ語でいうと「アレテイヤー」ですけれども、いわゆる近代人が考えているような真理ではないですよ。

どこまでもヘブライ人の言葉というものは、実存的な意味を持っている。必ずそれは実現する。実現しないような空理空論は真理でない。真実（信実）の神というのは必ず成就させる、成し遂げる。これが真実（信実）ということなんです。心の上でただ真実なんて言っているのではないですよ、真実とか真理とかいう言葉は。だから、非常に行為的なんです。

「行為また行為。明日に遷延するな」

という。今日のうちにすべてやれ。今日為すべきことは必ずやれと。これはゲーテの言葉の中にもあります。

「明日があるからと言う人は結局、明日もまたやらない」

という。これは怠け者のことをいう。

私なんか、小さい時のことを思い出すと、誠にどうも「明日があるから」の方の人で困った。なかなか実行できない。少しはいいかと思うと、また忘れてしまったり。やっと今頃になって目が覚めているような人間ですから、これから私は仕事をしようと思う。もっとも、今までだって全然していなかったのではなくて、いろいろやっていましたけれども。

今度はそれを本式に仕上げて行こうと始まっているのがこれでしょ。「著作」が私の行為だからね。そういう行為の内容はそれぞれですよ。人間を動かすものは行為なんです、言葉ではない。もちろん伝道の言葉は大事ですよ。言葉自身がある意味において行為だから。口をもってする行為だからね、空言でないから。

「キリストの言葉は正に実言だから、実現した」

と言っているでしょ。本当の言葉だから、「立て！」と言えば、立ってしまったではないですか。これは空言でないから、言葉自身が行為的な質を持っている。要するに、そういった実質のあるものが真理なんです。実質の無いものは、そこに「根源現象」が起きてこないようなものは、それは真理ではない。プロテスタントの信仰は革命を起こさなければダメです。いわゆる、

「信仰によりて義とする」
なんて甘っちょろいようなことではない。ということは、力が無い。観念の人は本当の力を持っていない。事実が証明するから。
それでは、行為のもとは何かというと、聖霊、御霊です。「行為、行為」と、行為にまたこだわったらどうにもならん。困るね。それでは元は何かというと、正に信なんです。信は何かというと、
「聖霊を受けとる」
ことが「信」なんだから。信ずるとは受けとるということ。聖霊を受けとるという内的行為なんです、信ずるとは。
「キリストという聖霊体を受けとる」
こと。聖霊体を受けとったら、静中に動あり。受けとっている世界は静かだよな。しかしながら、この静けさは物凄い動を持っている。動を持っていないような静は死んでいる静だ。静かに在るということが囲りをして在らしめているような在り方。これは「静中の動」です。お天道さんは物凄い勢いで動いているんだけれども、ちっともそう見えない。静かに天界にいるようだが、あのお天道さんが物凄い力をもって地球を動かしている。

●義人はただキリスト一人

「たった一人でもいたらば怨(ゆる)すぞ」

と。だから、この一人は物凄い一人なんです。人間的な義ではないから、義人と言ったって。これはもう新約の世界に来たら、キリストだけが義人です。「義人なし、一人だになし」ということ、アブラハムが言っているような「十人の義人」だって。パウロに言わせると、パウロも始め自分もこの義人だと思っていたところがとんでもない大間違いだと。

「義人なし、一人だになし」

と。これは詩篇の14篇に書いてある。

「1 愚(おろか)なるものは心のうちに神なしといえり かれらは腐れたり かれらは憎むべき事をなせり 善をおこなう者なし 2 エホバ天より人の子をのぞみみて悟るもの神をたずぬる者ありやと見たまいしに 3 みな逆(そむ)きいでてことごとく腐れたり 善をなすものなし一人だになし」（詩篇14・1～3）

と書いてある。義人は一人もいない。旧約でもやっぱり、神様の方から新約の光みたいなことがそこに出ている。パウロが、
「義人なし一人だになし。キリストだけが例外者であった」
と。何となれば聖霊の人は無者であったから、無者キリストであったから。
ですから、十人でお終いになっているけれども、その先は課題になっている。エレミヤに来てその解決が来た。一人いてもそれで怨すと。

「キリストを本当に徹底的に受けとっている一人の人がいればその町は恕(ゆる)される」ということ。だから、私が担いの心とか、担いの姿勢とか言っているのはこれなんです。町を全部担ってしまっている。人は知らないよ、何も。神様はその人の故に審きをまだ延ばしていらっしゃる。恕しているけれども、神様の恕しを受けとらなかったら逆に審きが来ますよ。

「俺たちは恕されている」

なんて、いい気になっていたら、それは審きが来る。恕しにぶつかって目が覚めたら、これは本当に、

「神さま！」

と言って感謝しなかったら、恕しは同時に審きを含んでいる。審きの奥に恕しあり、恕しはまた審きを含む。恕しをいい加減にしていたら、今度審かれたらお終いだ。この審きに遭ったら

「第二の死」

が来てしまう。本当の地獄行きになってしまう。神様の恕しというのは恐ろしいんだよ。だから、恕しを受けとらなかったら大変なことになる。その恕しは何かというと

「十字架」

なんです。十字架で恕されている。だから、十字架を受けとらないと大変なことになる。

「それでは、十字架を受けとらない一切の人は地獄行きですか」

と。そうはいかんよ、知らない人もあるし。どの人が天国に往って、どの人が地獄に往くか、誰も知らんよ、それは。けれども、一度知ったならば、この世界に本当に入って行かなくては。

これが十人から一人になって、その一人は遂に地上にはいない。誰もいなかった。ただキリストだけがその一人として現われた。イエス・キリストだけがその一人になり給うて、全世界の罪を恕しておられる。背負っておられる。これが十字架なんです。だから、キリストの十字架の故に、すべての人は恕されている。ただその恕しを受けとらなければ審きに遭う。これにぶつかって受けとらなかったら恐ろしいことになる可能性大いにありというわけです。でありますので、義人はただキリスト一人。これはガラテヤ書にも書いてある通り、ロマ書3章にある通り。結論はそういうことです。

アブラハムと神様との問答は、極まるところはエレミヤ記5章1節に来て、それから新約のキリストに来る。その「義人」はキリストです。そのキリストという義人の故に私たちもまた義人とされ、一切のものを担う存在にされている。それは男の人でも女の人でも同じことですよ。それだけの恩寵と使命と光栄に浴しているわけです。クリスチャンというのはそれだけの厚みを持った存在ですから。では終ります。